平成２８年度日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立久慈小学校　教諭　齋藤　賢一

１　派遣期日　　平成２８年１０月２２日（土）～１０月２２日（土）
２　研 修 先　　東京都日野第三小学校
　　〒191-0003　東京都日野市日野台 2-1-1
　　http://www.e-hino3.hino-tky.ed.jp/
３　研修内容　　国語授業のＵＤ～全員のアクティブラーニングを支える国語授業力～

（１）研修の動機

本校の課題研究は,「文章を読む力を高め，自分の考えをもてる児童の育成～国語科「読むこと」の指導を通して～」というものである。国語授業のユニバーサルデザインの在り方についてはもちろん，本校の課題である国語のアクティブラーニングについて，先進校の研究を研修するために参加した。

（２）当日の日程

①提案授業「やまなし」
②提案授業「大造じいさんとガン」
③授業協議会「全員のアクティブラーニングを支える国語授業力」
④授業プレゼンテーションＡ　５年・文学「注文の多い料理店」
⑤授業プレゼンテーションＢ　６年・説明文「インターネット・コミュニケーション」
⑥講演「全員のアクティブラーニングを支える国語授業力」
　講演者：桂　聖先生（筑波大附属小学校）

（３）研修報告

国語授業ＵＤ学会では，ユニバーサルデザインの要として，授業の「焦点化・視覚化・共有化」という三つの要件をふまえて，指導を具体化している。

「焦点（シンプル）化」とは，子供が授業で学ぶ際に,「何について考えればよいのか」を単純化する作業のことである。例えば,「クラスの友達にお気に入りの本の好きな場面を伝えよう」という授業において，低学年の児童は一冊の本から好きな場面を絞ることが難しかったり,「わたしが好きな場面は○○が△△したところです。」と書くことが苦手だったりすることがある。そこで，教師が場面を限定したり，本文の叙述の抜き出しだけに限定したりすることで，本時の中で自分がやるべき活動が明確になり，進んで授業に取り組むことができるのである。

「視覚（ビジュアル）化」とは，教師の発問を聞いたり，文章を読んだりしただけでは想像が難しい児童もいるので，黒板の板書の中に，一目で文章の対比ができるような掲示物を用意するというものである。特別支援学級の児童には，一斉指導で指示が伝わらない場面が多々見られる。そんな児童も発問内容や，課題などを分かりやすく掲示することでスムーズに取り組むことができる。今回の研修の授業では，取り立てて手の込んだ掲示物を用意したわけではなく,「センテンスカード」と呼ばれる，教科書の本文の抜粋を拡大したものを提示していた。しかしそこには，あえて文を少し変えておいて，子供たちに間違いに気付かせる，という仕かけも用意していた。これにより，児童は黒板に提示されたセンテンスカードと教科書を交互に読み比べ，自然と自発的な学習，アクティブラーニングを行っていくようになっていた。

「共有（シェア）化」とは，児童の考えを言語化し，児童本人だけでなく，隣の児童や小グループの児童，学級の児童へと，みんなで多様な考えを見聞きし，考えを深めていくことにある。共有の仕方については，３人グループを作り，１人が残り，２人が他のグループの話し合い状況を見に行き，残った１人が説明をする，といった形式をとったり，グループで話し合った内容を１つのホワイトボードにまとめ掲示したりするなど，多用な方法がある。学習課題として取り上げているテーマや，学級の実態に応じてその方法を変えることが望ましい。また，思考の結果を共有するだけでなく，思考過程を共有することにも大きな意味があり，その「考え方」を共有することがアクティブラーニングの要となっていくのである。

アクティブラーニングの考え方は,「主体的・対話的で深い学び」である。ユニバーサルデザインの要件である「焦点化・視覚化・共有化」,それが普段の授業の中に位置付けてあることが,学習指導要領における学力の要素である「学習意欲」「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力」を伸ばしていくことにつながる。

授業のユニバーサルデザインのテーマとは何か？本研修では「全員が,楽しく・分かる・できる授業づくりである」そのため,UD 研究会では学力の育成のために,授業 UD の段階として「参加」「理解」「習得」「活用」の 4 つに分け,全員がその段階をステップアップしていけるような授業づくりを基準として考えている。そのための方策として「焦点化・視覚化・共有化」や,指導教諭の授業の「しかけ」があるのである。授業のユニバーサルデザインとしての主軸はアクティブラーニングである。しかし,我々教員はその「主体的」「対話的」というものを誤解しがちである。「ある特定の子どもだけが活躍して進んでしまう授業」や「グループの学習形態になっていて,一見話し合っているように見えるが,参加していない子どもがいる授業」などは,UD 化された授業とは言えないのである。意見が活発に出ているとき,話し合いがスムーズに行われているとき,教師は「うまくいっている」と思いがちである。しかし,そこについていけていない児童や,興味がもてていない児童がいる場合,その授業は UD 化されていないのである。教師は,「どんなところにつまずきが予想されるか？」「子どもが興味を持てない理由は何か？」を考え,事前にそれを解消する「しかけ」を用意しておくことが肝要である。「目の前の子どものために,子どもが考えるための手立てを考えること」それこそが授業の UD なのである。

4　感想

本校（久慈小）では,課題研究として「国語の読みとる力を伸ばすための多様的な読み」を行っている。国語における「読み取る力」を伸ばすためには何が必要か？それを研究して協議していった時,やはり話題に上がったのは「アクティブラーニング」である。定義こそ「主体的な学び」と理解できるが,実際に授業においてはどのようなものを指し,どのように行えば良いのか？多くの先生が悩んだ壁である。子どもたちが進んでやってみようと思えるようなしかけ,そこに重点を置き,試行錯誤を続けた。「朗読会」「ペープサート」「感情曲線」「読書郵便」「本の帯づくり」「ディベート」など,様々な学習方法や学習課題を提示し,研究を進めてきた。講師の先生からは,様々な学習課題を用意して行うことは素晴らしいが,重要なのは,なぜその課題を行う必要があるのかである,と助言をいただいた。それは,今回研修した,授業のユニバーサルデザインについての学習会で言われていたことと正に一致していた。自分の担当する子どもたちの実態を把握し,その子たちが進んで学習できるようにするにはどんな学習課題・学習形態にしたら良いかを考え,RPDCA のサイクルで授業を行っていくことが重要であり,それがユニバーサルデザインというものなのである。「アクティブラーニング」とは,UD を支える学習の在り方そのものであり,それは私たちの教材研究や児童の実態把握なのであると,自信を持って取り組んでいって良いのである。

私は今回の先進校調査を通して,自分の学校にいるだけでは気付くことのできなかった多くのことを学んだ。ユニバーサルデザインとは何か。アクティブラーニングとは何か。そのための実践はどのようなものがあるのか。学んだことを自校にフィードバックし,学校全体に UD の輪を広げ,多くの児童に学ぶ喜びを伝えていきたい。